

学会発表渡航支援報告書

(ふりがな) 氏名	はやかわ たいき 早川 太基	所属・職名 京都大学文学研究科中国語学中国文学専修・博士後期課程
発表題名 (英語)	明代琴學東漸攷	
著者名	早川太基	
会議名 (英語)	2012 明清領域研究生論文発表會 2012 Postgraduate Student Conference on Ming - Qing Studies	
開催地(国、市)	香港	
参加期間	2012年 7月 9日 ~ 7月 11日	
<p>本学会は、香港中文大学人文学科研究所明清研究センターの主催であり、中国における近世というべき明清時代(1368~1911)の文学・言語・歴史・思想・芸術などについて研究する博士後期生の、論文発表および意見交換の場として開かれたものである。学会開催に到るまでの流れとしては、本年3月末に論文要旨を送り、当否審査を通過した後、6月15日までに論文の完成稿を送付し、開催の二週間前までには参加者全員の論文のネット上での公開が始まった。そのため事前に他者の論文を読み込んだうえで会場に臨むことが可能であり、質問および意見交換の場としてよく機能していたと感じられた。</p> <p>今年度は中国大陸・台湾・英国・アメリカ・日本から計62名の参加者があり、香港中文大学構内の二つの会議場を用いて二日間の日程で行われ、各自15分間の持ち時間で発表し、また他者の発表の司会・コメンテーターをつとめるという仕組みであった。論文を含めた使用言語はすべて中国語(一部の論文は英語)であった。</p> <p>報告者の発表は第一日目の冒頭に行われ、また第二日目の午後には、黄政(北京大学歴史系)氏の発表「江標旅日與日人之交往及其影響」についてコメントを述べた。</p> <p>今回の発表「明代琴学東漸攷」の内容は、明代嘉靖・万暦年間(1522-1620)に隆盛に赴いた七絃琴音楽が、日本の江戸社会においてどのように受け入れられたかを論じ、それを中国周辺諸国の近代における文化受容のあり方を示すひとつの例として分析したものである。実際に七絃琴を伝授したのは明朝滅亡により日本に亡命した東皋心越という仏僧であるが、当時の日本人に教授していった過程を、豊富な資料を駆使しながら再構成してゆき、この伝来もまた、当時の社会における中国文化への意識の高まりという背景のなかで捉える必要があることを指摘した。来会者からは、明代の音楽理論の日本に及ぼした影響などについて意見・質問があった。最後に発表の反省点であるが、発表時間をいささか超過したことや、拙い中国語については反省を發する次第であり、今後の向上の糧としたい。</p> <p>黄政氏の論文のコメンテーター役は、大過なく務められた。該当論文の中核である明治期の日中交流の研究については日本側も手薄であることを述べ、より精密な研究に向けては未整理資料の發</p>		

学会発表渡航支援報告書

掘が鍵になることを、例として『己丑謙集續集』という関連資料を挙げて論文内容を補説することにより、説明した。発表終了後にも、資料の読みについて意見交換した。

本学会では、多くの同年代の外国人研究者と交流を結ぶことができ、よい刺激となった。発表内容や日頃の研究について深更にいたるまで語り合い、書店を訪問し、また詩文の応酬や七絃琴の演奏などの文雅の交わりを通じて互いの親睦を深め、ネットワークを広げられたことは、今後の研究生活に益するところ必ずや甚大であろう。

最後に、渡航に際して援助いただいたCOEプログラムに、謝意を表する次第である。

